

## チームで取り組む親和的な集団づくり

### 教育相談チーム

#### 《研究の要旨》

本研究では、「学びの変革応援事業」として、親和的な集団づくりに関する支援を支援校に対して行った。支援においては、支援校の課題や希望を把握し、校内の担当者と教育相談チーム指導主事が打合せを行いながら支援内容や方法の検討を行い、学校の教員がチームとなって親和的な集団づくりの実践を行えるようにした。そして、支援校に対する支援の実際や成果や課題を踏まえて、教員がチームで取り組む親和的な集団づくりを支援するためのモデルプランを提案できた。

### I 研究の趣旨

「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」（文部科学省）によれば、前年度に比べ全国的にいじめの認知件数、暴力行為の発生件数、不登校児童生徒数は増加している。その傾向は、本県も同様である。「生徒指導提要」（文部科学省）においては、プロアクティブな生徒指導の在り方を改善していくことが、生徒指導上の諸課題の未然防止や再発防止につながると示されている。また、小学校及び中学校の学習指導要領総則において、「学習や生活の基盤として、教師と児童（生徒）との信頼関係及び児童（生徒）相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」が明記されており、個と集団の育成が児童生徒の発達を支援するために必要であることが述べられている。

さらに、「生徒指導提要」では、プロアクティブな生徒指導を実践する際、チームで取り組むことが重要であると示されている。多様な児童生徒への対応の困難さに対して、チームで親和的な集団づくりを考えていくことにより、同僚性を構築しながら互いに児童生徒の理解や指導の在り方について探究し合うことができ、教員の資質向上の促進につながると考える。また、本チームが担当する出前講座において、Q-Uの分析の依頼が毎年最も多く、訪問した学校からは「Q-Uを実施しているものの結果を活用することができていない」という課題を聞くことが多い。

そこで今年度は、「学びの変革応援事業」として、教員がチームとなって親和的な集団づくりを目指す学校を募集し、教育相談チーム指導主事（以下、所員）が支援を行っていくこととした。支援においては、学校の課題や希望を把握し、校内の担当者と所員が打合せを行いながら支援内容や方法の検討を行い、学校の教員がチームとなって親和的な集団づくりの実践を行えるようにした

（図1）。そして、支援した内容や方法及び成果・課題を踏まえて、支援するためのモデルプランを提案していくこととする。



図1 支援のイメージ

### II 研究の概要

#### 1 研究の目的

本研究の目的を、以下の通り設定した。

教員がチームで親和的な集団づくりに取り組めるようにするため、学校の課題や希望に合わせた支援の在り方を探る。

#### 2 研究の内容・方法

##### (1) 支援校

前年度に、本チームの支援を希望する学校を募り、小学校1校と中学校1校を選定した。

##### (2) 内容・方法

所員が、学校の担当者から学校の課題や希望を聞き、支援内容や方法について担当者と所員が打合せを行った上で、支援を実践する。

### III 研究の実際

本稿においては、中学校1校の実践について述べる。

中学校においては、学校の課題や希望により、現職教育における校内研修を中心とした支援を行った（図2）。また、研修主任が担当者となった。なお、校内研修は、教員の研修に係る負担感や多忙感を考慮し、各校内研修は1時間以内に行えるように設定した。

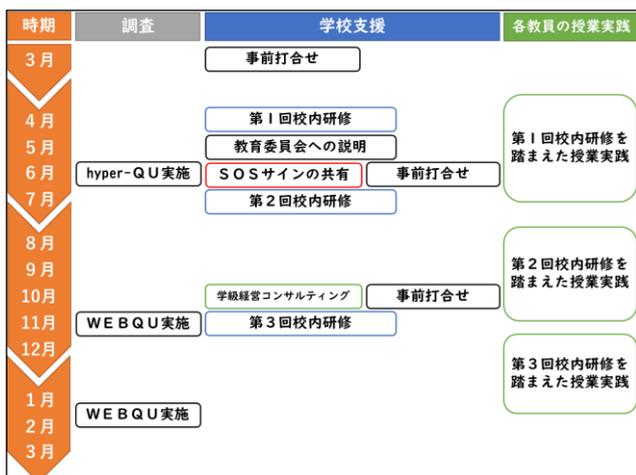


図2 中学校に行った支援

### 1 第1回校内研修事前打合せ

第1回校内研修の事前打合せのみ、学校側の意図により管理職と3月末に行った。その打合せの際、現職教育における校内研究と関連させながら本事業を活用していきたいとの希望が管理職からあった(図3)。また、第1回校内研修においては、前年度の生徒の実態から見いだした課題や研究主題と関連させて、「認め合う」姿の具現化に向けた協議を行うこととした。そして、校内研修においては、所員による講義型の研修ではなく、教員が同僚と対話しながら主体的に研修に臨めるように、所員が配慮しながら研修の進行を行うことになった。

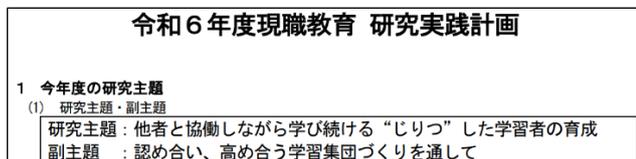


図3 現職教育研究実践計画

### 2 第1回校内研修

第1回校内研修は、4月1週目に設定した。これは、授業が実践される前に研究主題と関連させた研修を設定することで、教員に共通の目標を目指しながら次週から始まる授業実践に生かしてもらいたいといった管理職の意図があったためである。

研修の冒頭に、「『認め合う』姿を育てるために、授業で取り組めることをチームで考え、自分が4月からやってみることを決める」を、研修目標として設定した。次に、各学年に1枚のホワイトボードを用意し、協議で出された意見を共有できるようにした(図4)。これは、教育相談チームが専門研修や出前講座で実施しているホワイトボードを使ったケース会議の方法をアレンジしており、協議内容をホワイトボードに記入することで一人一人がメモを取る必要がなくなり、教員の協議を活性化させるために取り入れた。協議においては、ブレインスト

ーミング※1で行うことを事前のルールとして設定することで、教員それぞれの発言に対する心理的安全性を確保するようにした。

研修においては、まず「生徒が認め合っている姿」を各教員がどのようにイメージしているのかを話し合い、ホワイトボードの左半分に記入した。次に、今後の授業において、生徒の「認め合う」姿をどのような手立てを講じて引き出していくのかをホワイトボードの右側に記入した。その後、各学年のホワイトボードの記入内容や協議内容を交流する時間を設けた。協議内容を参考としながら、今後の教科指導において取り入れていきたい手立てを各教員が自己決定し、実践していくこととした。

ある教員は、「これまでは学力向上を目指す校内研修が多かった。今回の研修で、改めて生徒の『認め合う』姿を考え、先生方と共有することができた。授業で生徒の『認め合う』姿を具現化するための実践は新しいチャレンジとなるが、意識して取り組みたい」と話していた。

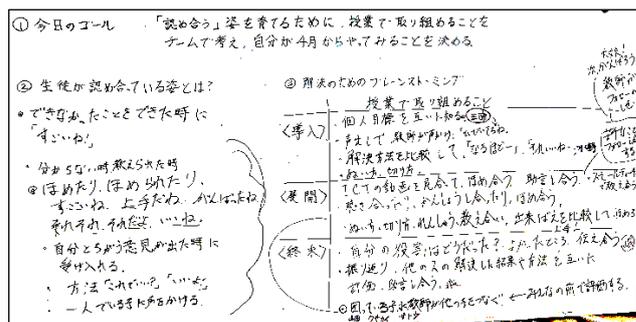


図4 第1回校内研修後のホワイトボード

※1 「批判厳禁、自由奔放、質より量、便乗歓迎」を原則としながら、解決策や新しいアイデアを発見するための発散的思考法

### 3 第1回校内研修を踏まえた授業実践

5月に行われた要請訪問では、4月の第1回校内研修の協議内容を踏まえて、各教員が「研究主題との関わり」として、本時における生徒の「認め合う」姿を引き出すための手立てを指導案に明記し、授業実践を行った(図5)。事後協議会においては、生徒の「認め合う」姿を引き出すための手立てや授業における生徒の姿についての協議がなされていた。

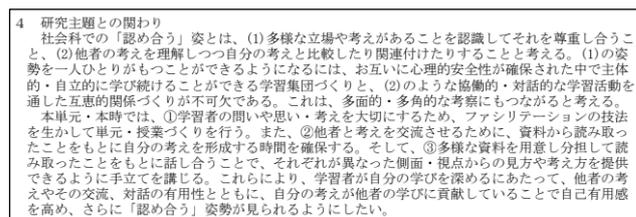


図5 指導案の「研究主題との関わり」の部分

後日行った教頭への聞き取りでは、「第1回校内研修で現職教育における研究主題に向けての協議が行われたことで、具体的な生徒の『認め合う』姿を共有し、自己決

定した手立てを要請訪問において全教員が実践できた。4月1週目に研修を実施したことは、授業で育みたい生徒の姿を具現化するための教員の意識のベクトル合わせになり、とても意味のあることだった」と述べていた。

#### 4 WEBQUについての教育委員会への説明

3月末に行った事前打合せの際に、現職教育における研究主題に関連する調査の一つとして、WEBQUを所員が管理職に紹介した。

その後、管理職からのWEBQU採用の要望を受けた教育委員会の担当指導主事から、「中学校にWEBQUを導入したいが、そのメリットを教えてほしい」との依頼があった。そこで、以下のような説明を担当指導主事へ行った。

Q-U及びhyper-QUにおいては、生徒が質問に回答したものを教員が回収し、全校生の質問紙がまとめ次第、取扱業者へ提出する。その際、結果が届くまでに約2週間かかる(図6の上段)。一方、WEBQUにおいては、生徒が個人端末から回答を入力するため、生徒の回答直後に、教員がそれぞれの生徒が所属している学級にどの程度適応しているのか、生徒がどのような困り感をもっているかなどを即時に把握できることがメリットである(図6の下段)。

その後、教育委員会は中学校へのWEBQU導入を決め、1学期には中学校が負担したhyper-QUを実施し、2学期以降にWEBQUを2回実施することになった。そうすることで、生徒の実態をよりきめ細やかに把握できるようにした。

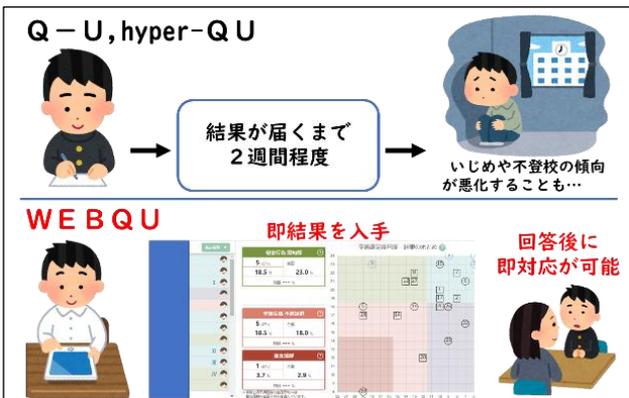


図6 教育委員会への説明資料

#### 5 hyper-QU実施直後のSOSのサインの共有

hyper-QUの質問項目には、いじめや不登校などのSOSのサインとして捉えられる項目があるが、前述したようにhyper-QUの分析結果が学校に届くまでには2週間程度かかってしまい、生徒のSOSのサインに対して即時に対応できないという課題があった。そのため、6月に生徒がhyper-QUに回答した直後、全生徒の回答を

Googleスプレッドシートに入力し、生徒がどのようなSOSのサインを出しているのかを教員全体でデータを共有することで、支援に生かせるようにした(図7)。

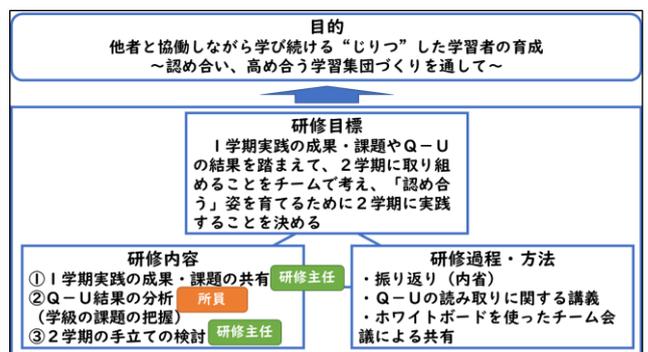
ある教員は、共有されたデータを見て、「教科では担当していないが、部活動顧問として関わっている生徒が、まさかこんなに承認感が低いとは思わなかった。部活動で生徒が取り組んでいることを認めたり、担任にも生徒の頑張っている姿を伝えたりしながら支援していきたい」と話していた。他にも、SOSのサインのデータを参照しながら、心配な生徒への教育相談を教員が分担して行うなど、共有したSOSのサインのデータが役立てられていた。

A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N								
		(6月)		B		い		ご		ち		の		よ		い		ク		ラ		ス		す		る								
				い		じ		め		や		不		登		校		の		傾		向		が		悪								
				化		す		る		こ		と		も		…																		
1	出席番号	氏名	項目1.1	項目1.2	項目1.3	項目1.4	項目1.5	項目1.6	項目1.7	項目1.8	項目1.9	項目2.0	項目2.1	項目2.2	項目2.3	項目2.4	項目2.5	項目2.6	項目2.7	項目2.8	項目2.9	項目2.10	項目2.11	項目2.12	項目2.13	項目2.14	項目2.15	項目2.16	項目2.17	項目2.18	項目2.19	項目2.20		
2	1	山田 太郎	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
3	2	田中 花子	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
4	3	佐藤 健一	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
5	4	鈴木 美咲	3	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	5	高橋 誠	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	6	渡辺 大地	0	2	2	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	7	山本 悠太	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	8	佐々木 未来	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10	9	中村 翔太	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

図7 hyper-QUによるSOSのサインの共有

#### 6 第2回校内研修事前打合せ

第2回校内研修に向けて、研修主任と所員で事前打合せを行った。研修内容については、「認め合う」集団づくりを目指した1学期の実践の振り返りや、hyper-QUの結果の分析、2学期に講じる手立てについて協議することとした。その後、打合せ内容を、『研修観の転換』に向けたNITSからの提案(第一次)(独立行政法人教職員支援機構, 2024)における「研修デザインの三角形」を参考にしながら、研修目標及び研修内容、研修過程・方法を研修主任と所員が共有しながら研修をデザインした(図8)。



また、今後の校内研修に係る研修主任と所員の思いを共有し、教員の主体性を大切にすることが現職教育を充実させることとなることを確認し、校内研修における支援は必要な部分のみ所員が行うこととした。そこで、第2回校内研修においては、hyper-QUの結果の分析に関する内容については、専門的な説明を所員が行い、それ以外については研修主任が研修を進行することとした。

## 7 第2回校内研修

7月に第2回校内研修を実施した。研修の冒頭に、「1学期実践の成果・課題とhyper-QUの結果を踏まえて、2学期に取り組めることをチームで考え、『認め合う』姿を育てるために2学期に実践することを決める」を、研修目標として設定した。

次に、教員が各自の1学期実践の成果・課題について、ホワイトボードに記入しながら発表し合った(図9)。互いの発表を聞き合う中で、互いの取組の詳細を質問し合ったり、発表者の取組の効果が生徒の姿にどのように表れてきたのかを他の教員が話したりするなど、それぞれの教員の実践の成果や効果について、教員同士が認め合いながら話し合う姿が見られた。

その後、所員からhyper-QUの結果の活用の仕方についての説明を行った。説明を受け、各学級担任は自分の学級の状態や配慮が必要な生徒について把握し、学年間で情報を共有した。

そして、hyper-QUの結果を把握した上で、2学期にどのような実践を行うか、ブレインストーミングで協議を行った。授業や行事等で生徒の「認め合う」姿を引き出すための手立てについて、具体的な話合いがなされていった。

ある学年では、hyper-QUの結果から学年全体で「かわりのスキル」に課題があることや日常の授業においても生徒同士の関わる姿に課題を感じていたことから、今後の生徒同士の関わり合いをどのように促進すればよいかを話し合っていた。ある教員は、「道徳の授業においては、話合いのルールを決めておくことで全員が話せるような手立てを講じていた。自分が担当している教科においても、道徳で行っていた話合いのルールを取り入れて、生徒同士の関わり合う機会が増えるように実践したい」と話していた。前述の教員の話を受け、別の教員は、「この学年の生徒は、話合いのルールのようなやり方の提示があると取り組み方が分かって、自分たちで進められる強みがある」と話していた。その後、さらに同学年を担当している教員で話合いを進め、生徒の強みを踏まえてどのような共通した実践をしていけば生徒の関わり合いを促進していけるのかを協議していた。

このことから、hyper-QUの結果を同僚と共有したり、生徒観察を通して課題意識をもったりしたこと、そして生徒にはどのような強みがあるのかを学年で共有し、今後の手立てを協議することにより、担任が学級経営を個で抱えるのではなく、学年の教員がチームとなって具体的な手立てを共有しながら親和的な集団づくりを目指す姿を確認することができた。

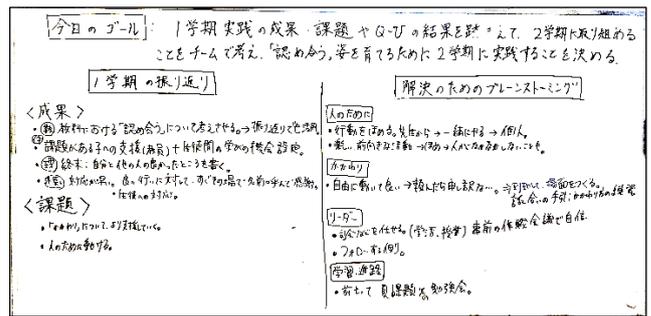


図9 第2回校内研修後のホワイトボード

## 8 第2回校内研修を踏まえた授業実践

第2回校内研修において、ある学年では、一学級のhyper-QUの結果と生徒の実態から、生徒が学級で安心して発言できるようにするための協議を行っていた。協議内容を踏まえ、その学年の社会科担当の教員は、生徒が安心して発言できるようにするための手立てを講じた授業実践を行った。

単元の導入において、生徒一人一人が人権問題についての問いを表現できるようにするため、掲示板アプリを使用することとした。授業では、人権問題に関する複数の事例を教員が提示し、その事例から考えた問いを生徒が掲示板アプリに入力し、共有画面を見ながらグループの生徒同士で対話し、新たな問いをさらに見出しながら掲示板アプリに入力した(図10)。教員は、意図的に指名して生徒の問いを全体に広げたり、指名した生徒の問いから学びが広がったことを称賛する言葉を個別にかけたりするなど、事前にhyper-QUの結果や授業の中で気になる生徒が安心して発言できるようにするための手立てを講じていた。



図10 掲示板アプリでの共有

教員は、気になる生徒を事前に座席表に控え、その生徒が入力した問いを拾い上げて全体に広げていた。

授業後の教員へのインタビューにおいては、「これまでの授業でなかなか取り上げることができなかった生徒の考えを広げることができた。校内研修の協議内容を踏まえたことで、実態に応じた授業の手立てを講じることにつながった」と話しており、校内研修の内容を授業実践につなげる教員の姿を確認することができた。

## 9 学級経営コンサルティング

中学校から、ある学級の学級経営に関しての相談が10

月にあった。そこで、hyper-QUの結果と担任からの生徒に関する情報提供に基づき、今後の学級経営の手立てについて担任と所員が相談した。相談の中で、担任から「これまで生徒の言動を注意するような指導場面が多くなっていた」との気づきがあった。そこで、応用行動分析※2の考えに基づいた生徒の望ましい行動に着目した支援を、担任に意識してもらえるようにコンサルティングを行った(図11)。

その後、1回目のhyper-QUで課題としていた複数の生徒が、2回目のWEBQUにおいて承認得点が高まり、学級全体の親和性の高まりも確認することができた。

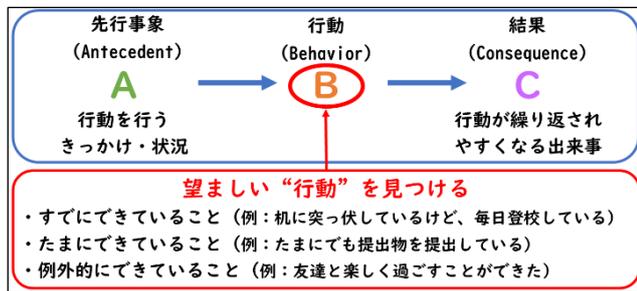


図11 応用行動分析

※2 問題状況を「先行事象」「行動」「結果」の3つで理解し、同様の結果が得られる別の行動の獲得などにより、より適応的な行動を形成していく行動療法の技法の一つ

### 10 第3回校内研修事前打合せ

第3回校内研修に向けて、研修主任と所員で事前打合せを行った。研修内容については、2学期のこれまでの実践についての成果・課題を振り返ることとした。また、中学校では11月に初めてWEBQUを実施するため、1学期に実施したhyper-QUとWEBQUの違いや操作方法、結果の活用の仕方について、所員が説明することとした。WEBQUにおいては、教員が自分の端末からも他学級の結果を閲覧することができるため、同学年の各学級の状態や生徒のSOSのサインを共有しながら、今後の授業実践の手立てを協議することとした(図12)。

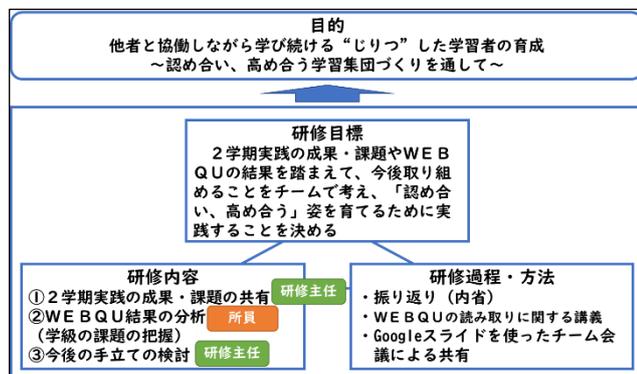


図12 第3回校内研修に係る研修デザインの三角形

### 11 第3回校内研修

11月に第3回校内研修を実施した。研修の冒頭に、「2

学期の実践の成果・課題やWEBQUの結果を踏まえて、今後取り組めることをチームで考え、『認め合い、高め合う』姿を育てるために実践することを決める」を、研修目標として設定した。

次に、学年ごとに設定したGoogleスライドに教員が各自の2学期実践の成果・課題について入力し、発表し合った。これまでの研修においてはホワイトボードへの記入に時間を要したが、Googleスライドに各教員が同時入力することができたため、第1回及び第2回校内研修よりも、多様な手立てについて情報共有することができた。

その後、所員からWEBQUの活用の仕方について説明を行った。WEBQUにおいては、1学期に実施したhyper-QUの分析結果に加えて、学級の「安定度」と「活性度」を分析することができることを伝え、今後の学級経営にWEBQUの結果を反映させるための視点を提示した(図13)。

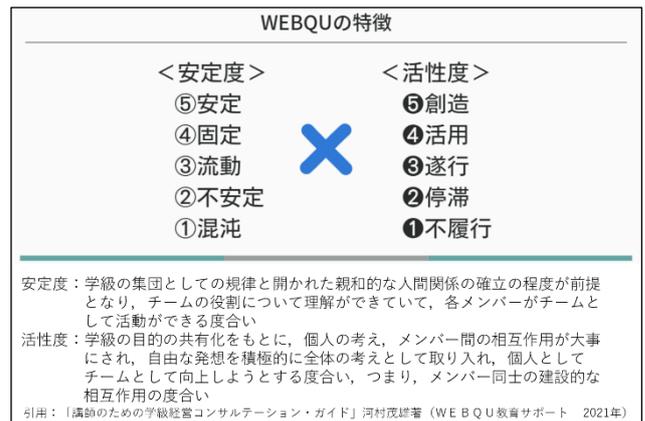


図13 研修で提示したスライド

同学年の各学級のWEBQUの結果を把握した上で、それぞれの学級の状態に応じてどのような手立てを講じていけばよいのかをGoogleスライドに入力し、学級の状態に合わせた手立てについて協議した(図14)。

ある学年では、WEBQUで「親和型-安定-創造」と分析された学級については、「高め合う」視点で協議がなされた。ある教員は、「学習のきっかけとなる教材や発問を用意し、後は生徒が自律的に学習を進められるようにする」といった、親和的な集団だからこそ生徒の自律を促しながら「活性度」が促進するような授業展開の手立てを入力し、学年の教員に説明していた。

また、「ゆるみ型-流動-遂行」と分析された学級については、「認め合う」視点で協議がなされた。ある教員は、「活動の振り返りの時、良かった点やルールに沿ってできていた部分を承認する」といった、学級の状態から学級にルールを確立させる必要性を見出し、「安定度」が促進するような授業展開の手立てを入力し、学年の教員に説明していた。

さらに、「孤立傾向の生徒も入れるように、グループづくりや教師の声掛けを工夫する」と入力した教員の説明から、生徒個人のSOSのサインを学年で共有し、同学年の教員で孤立傾向の生徒への共通した支援を確認する姿も見られた。

WEBQUから得られた学級の状態や生徒個人のSOSのサインなどの結果を踏まえて、今後の授業や行事、日常生活においてどのような指導や支援を実践していけばさらに親和的な集団にしていけるのかを、各学年の教員がチームとなって協議する姿を確認することができた。

1組 【型-型-型】	2組 【型-型-型】	3組 【型-型-型】
学級のきつかけとなる教材や発問を用意し、後は生徒が自律的に学習を進めるようにする。(自分たちで問いを立てて、協働的に調べ学習ができる。)	要支援の子らに対し面談を行い、感じている不安を解消するためにできることを相談する。	活動の振り返りの難、良かった点で、ルールにそってできた部分を解説して承認する。
お互いの学習状況を確認する機会を設定することで、協働的な学びにつなげるきつかけをつくる。	学級集団の中で再確認される経験が少ないと思われる生徒も認めていける学習集団を目指す。意図的に場面を設定する。	係や班の活動の中に、メンバー間の認め合いを取り入れ、小グループが関われるようにする。
生徒の学びや考えの良さを価値づけ、自分から学びに向かうよう支援する。		構成されたグループ活動を設定し、ルールにそって活動を一通りやりきる体験を繰り返す。
		学習活動の役割を、輪番をして取り組ませ、いろいろな役割の行動がとれるようにする。
年共通		
学年全体の親和的な雰囲気の中に、孤立傾向の子どもも入れるように、グループづくりや教師の声掛けを工夫する。	どのクラスも、生徒が自律的・自立的に学びを進めることができるので、最低限のルールを共有して、あとは生徒に任せる機会を設定する。	生徒の発言を積極的につなげ、学びに巻き込んでいくような学びや話し合いのコーディネートを工夫する。

図14 第3回校内研修後のスライド

## 12 校内研究の実践の記録

校内研究では、「研究ポートフォリオ」として、実践記録を各教員がまとめていた(図15)。

二 学 期	3 2学期の研究実践 ～「高め合う」学習集団へ～
	(1) QU (1回目)の結果分析を通して
	①担当学年・学級の課題 ②課題の解決に向けた手立て
	第2回研修会の内容 「QU①の結果分析」
	第2回研修会の内容 「QU①から見えた課題に対する手立て」
	(2) 日々の研究実践を通して
	第3回以降の研修会の内容 (QU②実施後) 「これまでの実践の振り返り」
	(例) 太平洋戦争の単元で、一人ひとりが問いを立て、それをMetaJiの共同編集機能を使って共有した。それぞれの視点の違いから、考えの多様性に気づき、それを基に考えを深めていた。素朴な問いを生かすことで、互いの認め合いにつながった。
	(3) QU (2回目)の結果分析を通して
	①担当学年・学級の変化 ②課題の解決に向けた手立て

図15 研究ポートフォリオ

ある教員は、教科指導において「ゆるみ型」の学級を担当していたため、校内研修における協議を踏まえて、「集団のルールを自分たちで決めさせる。定期的に振り返らせ、ルールが守れているのか自己評価させる」ことを、「研究ポートフォリオ」の「課題解決に向けた手立て」の欄に記入していた。その後、実践を重ね、振り返りとして、「ルールの確立と徹底をねらい、班編成の仕方とルールについて話し合いを行わせた。学級委員が司会を務め、学級全体から意見を募って自分たちのルールを決めさせた」と記入していた。

校内研修において共有した学級の状態や協議内容を踏まえて自己決定した指導や支援の手立てを「研究のポートフォリオ」に記入しながら振り返るといった、個人としての実践を積み重ねながら、各教員が親和的な集団を

目指す姿を確認することができた。

## IV 研究のまとめ

### 1 研究の考察

#### (1) Q-Uの結果

6月と11月に行ったQ-U(以後、hyper-QU及びWEBQUの区別が生じないため、Q-Uと表記する)の結果は、以下の通りだった(図16)。学級生活満足度尺度においては、6月及び11月ともに学級生活満足群が全国平均値を上回り、学級生活不満足群が下回っていた。また、学校生活意欲尺度及びソーシャルスキル尺度においては、6月及び11月ともに全国平均を上回っていた。2回のQ-Uの結果から、「意欲をもって学校生活を過ごせる」、「適切なソーシャルスキルを発揮しながら他者に関わっている」、「学級に適応できている」と、多くの生徒が回答しており、中学校全体で親和性が育まれていることを確認することができた。

学級満足度尺度	6月	11月	全国平均
学級生活満足群	69%	65%	41%
非承認群	8%	4%	18%
侵害行為認知群	13%	19%	13%
学級生活不満足群	10%	12%	28%
学校生活意欲尺度	6月	11月	全国平均
友人との関係	18.6	18.3	17.3
学習意欲	16.8	16.4	15.3
教師との関係	17.8	17.1	14.5
学級との関係	18.0	18.0	15.7
進路意識	15.8	15.7	14.7
部活動	18.3	22.3	17.1
ソーシャルスキル尺度	6月	11月	全国平均
配慮のスキル	34.0	34.3	31.8
かかわりのスキル	30.7	30.2	29.0

※6月(n=176), 11月(n=173) ※全国平均(%)はhyper-QUより引用

図16 中学校のQ-Uの結果

#### (2) 校内研修における支援について

12月に中学校の教員を対象に、「所員が支援した校内研修で、親和的な集団づくりに役立った内容」について問うアンケートを実施し、回答を得た(図17)。

- ・4月の年度当初に行った、授業の中で認める場面を考えた研修がよかった。
- ・Q-Uの結果の読み取り方の講義がとてもためになった。
- ・Q-Uを利用した学級への働きかけや生徒への声掛けの工夫を協議できたことが実践につながった。
- ・授業のルールづくり(準備や話の聞き方など)を明確にした。
- ・先生方の日頃の実践の共有が参考になった。
- ・研修によって、生徒の「認め合い・高め合う」姿の意識化が図られた。

図17 教員の校内研修に関する回答

校内研修においては、Q-Uの結果を踏まえて同学年の教員が、授業を中心とした手立ての協議を繰り返し行った。学級の状態や生徒の実態を客観的に把握するため

のエビデンスとなるQ-Uの結果を同学年の教員で共有したことや、共有した学級の状態や生徒の実態を踏まえた手立てについて協議したことで、親和的な集団づくりのための実態に合わせた指導や支援を、教員がチームとなって実践することにつながったと考える。

第3回校内研修後に行った教頭へのインタビューでは、「昨年度まではQ-Uの結果を担任に渡し、担任が一人で今後の手立てを検討し、1枚のレポートにまとめて提出してもらっていた。しかし、今年度は、同学年の教員が、各クラスのQ-Uの結果を踏まえて授業での手立てを協議し、実践を積み重ねたことで、教員がQ-Uの結果を生かす形が取れるようになった。そのようなことから、Q-Uの結果に結びつき、親和的な集団として育まれていると考える」と話していた。

このことから、所員が行った支援が、教員がチームとなって親和的な集団をつくる実践に寄与したと考える。

### (3) チームで取り組む親和的な集団づくりの一考察

中学校に行ってきた支援から、教員がチームとなって親和的な集団づくりをするためには、以下の視点が必要ではないかと考える。

まず、中学校が4月1週目に校内研修を設定していたように、教員の意識のベクトル合わせを年度当初に行うことが重要であると考え。中学校では、生徒同士の「認め合う」姿を教員が共有したことにより、教員が共通の目標に向かう学校全体の実践となっていた。

次に、学級の状態を客観的に捉えるために、Q-Uのような信頼性と妥当性がある調査を行い、活用することが必要であると考え。学級の状態を教員の経験則のみで把握するには限界があり、エビデンスを活用しながら客観性をもって学級の状態を把握する必要があると考える。調査結果の活用においては、担任が個人で調査結果を把握するだけにとどまるのではなく、同僚とチームとなって学級の状態を把握し、学級の状態に合わせた手立てを検討することが必要であると考え。中学校では、エビデンスを基にした協議を通して、自分の授業に取り入れる手立てを具体的に考え、自己決定し、実践する教員の姿が見られた。

さらに、中学校の教員は、毎回の校内研修で、実践してきた手立てを振り返ったり、今後の手立てについて協議したりするなど、相互の意見を大切にしながら対話していた。このような姿から、職場における心理的安全性を基に、学級経営を個人で抱え込むのではなく、同僚と対話を重ねながら実践していくことが重要であると考え。

そして、校内研修で協議した手立てを授業で実践し、

その成果や課題について対話し、今後の授業における手立てについて協議を繰り返した校内研修は、以下のような「AARサイクル」を繰り返すことになり、教員の学びにつながったのではないかと考える(図18)。

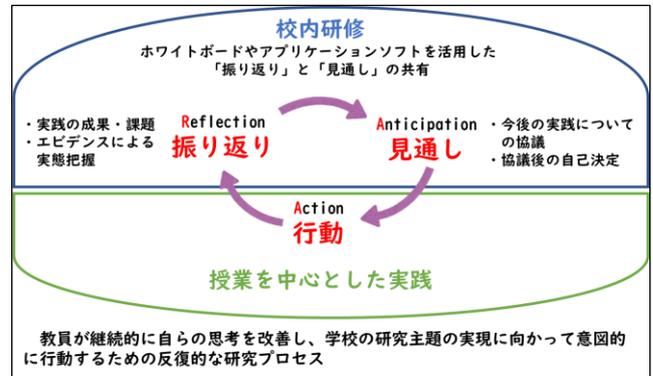


図18 現職教育におけるAARサイクル

「AARサイクル」とは、「OECD Learning Compass 2030 仮訳」において、「見通し・行動・振り返り(AAR)サイクルは学習者が継続的に自らの思考を改善し、集団のウェルビーイングに向かって意図的に、また責任をもって行動するための反復的な学習プロセス」と示されている。

中学校においては、まず、4月の第1回校内研修で「見通し」をもち、次に、授業実践を中心とした「行動」を起こし、そして、第2・3回校内研修で授業実践を中心とした「行動」についての成果や課題を対話で「振り返り」、さらに、今後の授業実践の手立てを協議しながら「見通し」をもつといったサイクル、つまり、「AARサイクル」が循環した現職教育であったと考える。

以上のことから、校内研修が現職教育における「AARサイクル」の循環を促進させたことで、教員がチームとなって親和的な集団づくりを実践できたのではないかと考える。

### (4) チームで取り組む親和的な集団づくりを支援するためのモデルプラン

支援校の中学校教員が親和的な集団づくりを目指し、チームとなって実践を重ねた姿から、本チームがモデルプランを作成した(図19)。モデルプランにおいては、支援する小学校及び中学校において年間2回のQ-Uを実施し、エビデンスを踏まえた親和的な集団づくりの支援を想定している。

まず、研究の実際のように、どのような児童生徒を育てていくのかを年度当初に対話し、手立てを協議する校内研修を設定する。同じベクトルで生徒に指導・支援を重ねた中学校の教員の姿から、年度初めに学校全体のベクトル合わせのための研修が重要であったと考える。そ

のため、多忙な年度初めの研修であっても設定が必要な研修であると考える。

次に、5月末から6月初めにQ-Uを実施し、6月中に校内研修を設定する。これは、Q-Uの結果から学級の状態や児童生徒のSOSのサインを把握し、夏季休業1か月前に教員同士で対応策を協議し、児童生徒への適切な指導・支援を行うことで学級の親和性を高め、安心して夏季休業後に児童生徒が登校できるようにすることを目的としている。

その後、9月末から10月初めに2回目のQ-Uを実施し、10月中に校内研修を設定する。これは、Q-Uの結果から学級の状態や児童生徒のSOSのサインを把握し、冬季休業前に教員同士で対応策を協議し、児童生徒への適切な指導・支援を行うことで学級の親和性を高め、安心して冬季休業後に児童生徒が登校できるようにすることを目的としている。

このような研修の適時性を踏まえて計画することと併せて、学級の状態や教員のニーズによっては、教員への個別支援として、学級経営コンサルティングや児童生徒の実態に合わせたプログラムを提案することで、親和的な集団をつくるための支援が充実すると考える。



図19 親和的な集団づくり支援のためのモデルプラン

なお、本研究においては、エビデンスを得るためのツールとしてQ-Uを使用した。その他のツールの選定に当たっては、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)」(文部科学省、2023)における別途2「学校風土の把握ツール」を参照することを提案する。

## 2 研究の成果

学校の課題や希望に応じて行ってきた支援は、教員がチームとなって親和的な集団づくりを目指す一助となった。特に、Q-U実施後の校内研修の設定や研修内容及び方法を学校の担当者と打ち合わせながら計画すること

で、学校の実態に応じた支援の充実につながった。

また、中学校における支援を踏まえ、親和的な集団づくりを目指す学校を支援するためのモデルプランを作成することができた。

## 3 今後の課題

学校の課題や希望に応じてその都度、支援を行ったが、支援校が年間の見通しをもって活用するためには、所員による具体的な提案も必要であった。

多忙な学校現場において、今後は所員がモデルプランを支援校に提示し、それらを学校が年間計画に位置付けることで、より効率的・効果的な支援を実現できると考える。

### 〈参考文献〉

- 1) 学びの変革応援事業 (福島県教育センター 2023年)
- 2) 生徒指導提要 (文部科学省 2022年)
- 3) ホワイトボードでできる解決志向のチーム会議 佐藤節子 (図書文化 2021年)
- 4) 「研修観の転換」に向けたNITSからの提案(第一次) (独立行政法人教職員支援機構 2024年)
- 5) 公認心理師のための「心理支援」講義 下山晴彦他 (北大路書房 2022年)
- 6) 講師のための学級経営コンサルティング・ガイド 河村茂雄 (WEBQU教育サポート 2021年)
- 7) OECD Learning Compass 2030 仮訳 秋田喜代美他 (2020年)
- 8) 誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン) 別途2「学校風土の把握ツール」 (文部科学省 2023年)

### 〈資料〉

中学校における3回の校内研修の様子をイメージ動画にした。

